

発見された個人壕

—継続する壕調査・池田—

現在沖縄自動車道の高架橋工事がすすめられている池田で、一月十五日に工事現場から壕が発見されました。

場所は池田ハイツから北西側の斜面で、ニービ（シルト質砂岩）を掘りこんでつくられていました。この壕は個人壕で、字池田在住の潮平寛雄さんの父・寛降さんと兄・寛正さんによって掘られたとのこと。

壕の構造は、工事によって落盤した二つの通路(?)を入ると、中の高さは約一五〇〜一六〇センチ程で右側に奥行約三二〇センチ、幅約二三

〇センチのスペース①があり、さらに奥へ行くと奥行約一七〇センチ、幅約一八〇センチの空間②がもうけられています。

左側③は落盤した通路とみられ、奥の空間を含め主抗道④は全長約七一〇センチとなっています。

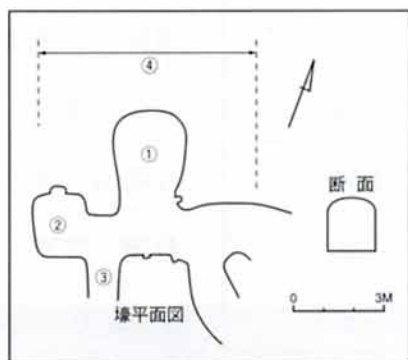
壕の壁の所々には、灯りとの口ウソクを置いたとみられる穴が造られており、また奥の空間付近の壁には「沖口(?)」という字が掘られています。

寛雄さんは沖縄戦当時本土へ徴兵されていたようです



△字池田で発見された個人壕内部のようす。

が、この壕には寛雄さんの家族など約三十人が避難していたようです。米軍が上陸して戦火が激しく



△図面協力：三善建設

なると、歩ける人はみな南部へ避難しましたが、寛雄さんの母親の両親と、けがをした二、三名の人々はこの壕で捕虜になったとのこと。

※池田は沖縄戦当時には武部隊が駐屯し、昭和十九年ごろ池田部落内に陣地壕を築いたが、武部隊はその後台湾に移ったようで、部落にはあらたに石部隊が駐屯したという。米軍上陸後戦闘が激しくなってきたと、池田一带には多くの(約三万人ともいわれる)人が避難し、この個人壕のある谷間にはたくさんの避難壕が掘られていたという(「西

原町史」第三巻・資料編二「西原の戦時記録」。

町史では去年発刊された「西原町史」考古編のなかでも戦跡考古学の立場から戦跡壕の調査・記録をしており、それは今後も継続していこうと考えています。

旧日本軍の陣地壕ではない個人壕の調査は今回がはじめてでした。個人壕はその数が多く、すべての数を把握するのは(開発がすすんだ現在において)難しいことです。しかし、できうるかぎり今後も調査を行い記録を残すことで、沖縄戦当時の人々の痕跡をたどることができると考えています。それはお話しをうかがうだけでなく、実際に壕を目の当たりにすることによってより一層真実に迫ることができるとは思いません。今回、寛雄さんにお話しをうかがう中で新たな壕の存在を知ることができたのですが、それは開発のため、現存していないとのこと。こんなとき、町史に携わる私たちの責任を改めて思い知らされるのでした。